

小 学 校

平 成 5 年 度

教育研究員研究報告書

特 別 活 動

東京都教育委員会

平成5年度

教育研究員名簿

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・ 下学年	江東	第五大島	関根麻美子
	大田	矢口東	伊藤ゆかり
	世田谷	多聞	笹間伸也
	世田谷	九品仏	樋口典子
	練馬	大泉第三	○佐藤ちはる
	葛飾	南綾瀬	泉幸江
	江戸川	小松川	水島奈緒美
	町田	南第二	森田由美
	保谷	本町	石森孝

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・ 上学年	港	青南	宮野いずみ
	文京	柳町	高宮良子
	台東	東泉	中村孝
	大田	大森第二	布施芳文
	板橋	志村第六	○福田俊彦
	板橋	中根橋	長田信彦
	足立	西新井第二	渡邊精一
	昭島	拝島第四	野村忠文
	町田	成瀬台	山下節子
	狛江	狛江第六	金平純三

◎全体世話人 ○分科会世話人

	地区名	小学校名	氏名
児童会活動	新宿	余丁町	◎鈴木清子
	北	北園	○石井友行
	足立	西新井第一	本村敏士
	江戸川	東小岩	丹野静子
	立川	多摩川	玉利節子
	三鷹	井口	浅野正臣
	日野	潤徳	牧野豊

	地区名	小学校名	氏名
学校行事	杉並	八成	橋本弥記
	荒川	第五峡田	内海巧
	練馬	開進第一	○赤羽根智
	八王子	第二	馬場玲子
	青梅	第2	正木美恵子
	東村山	大岱	福山広伸
	東大和	第八	井上信子

担当 教育庁指導部初等教育指導課長 小島 宏
 教育庁指導部主任指導主事 桑原 利夫
 多摩教育事務所指導主事 佐藤 正吉

平成五年度 教育研究員（特別活動）研究主題

互いのよさを生かし、認め合い、高め合う集団活動を通して

児童の自主的・実践的態度を育てる指導

目 次

I 研究の概要	2
II 一人一人が互いの考えを大切にし、共に活動しようとする意欲や態度を 育てる支援のあり方 (学級活動下学年分科会)	3
1. 主題設定の理由	3
2. 研究仮説と仮説検証の視点	4
3. 研究内容・(1)実践事例 (2)実践事例	5
4. まとめと今後の課題	7
III 一人一人が個性を発揮し、互いを高め合う学級活動の指導の工夫 (学級活動上学年分科会)	8
1. 主題設定の理由 2. 研究の仮説と仮説検証の視点	8
3. 研究内容・(1)実践事例 (2)実践事例	10
4. まとめと今後の課題	13
IV 互いのよさを認め、一人一人が意欲的に活動する代表委員会の指導の工夫 (児童会活動分科会)	14
1. 主題設定の理由	14
2. 研究仮説と仮説検証の視点	14
3. 研究内容・実践事例 1. 2. 3.	17
4. まとめと今後の課題	19
V 互いのよさを生かし、協力して活動することの楽しさを味わう健康安全 ・体育的行事の指導の工夫 ——運動会の指導を通して—— (学校行事分科会)	20
1. 主題設定の理由 2. 研究の仮説と仮説検証の視点	20
3. 研究内容(1)支援の事例(2)指導の留意点(3)実践事例	21
4. まとめと今後の課題	24

I 研究の概要

共通研究主題

互いのよさを生かし、認め合い、高め合う集団活動を通して

児童の自主的・実践的態度を育てる指導

児童はだれでも、心豊かに、主体的、創造的に、生きていくために、人間、自然、社会、文化などに適切にかかわる中で、自分のよさや可能性を発揮して、自分や所属する集団の課題に積極的にチャレンジし考え、判断し、よりよい解決、実践をめざそうとする存在である。そして、友達や集団からその努力の姿を認められた時、有用感や成就感を得るとともに、心理的安定を得ることができる。

しかし、現実の児童の姿に目を向けると、物質的に豊かな生活を送っている反面、人間関係の希薄化に起因する心の貧しい面がクローズアップされてくる。また、恵まれた環境の中で育っているために、自主性や主体性の欠けた言動が見受けられる場合もある。さらに、自己中心的で、耐性や協調性、責任感などが十分に身につけていなかったり、社会性の発達に問題が見られたりする。

こうしたことから、今、学校教育では、所属する集団の問題点に目を向け、その原因を適切に捉え、解決していこうとする意欲や態度を育成するとともに、互いの活動や役割を認め合い、人間関係を広め、深めていく教育が求められている。

そこで、望ましい集団活動を通して、なすことによって学ぶ教育活動としての特質をもち、個性の伸長と社会性を育む特別活動においては、学校や学級集団の中で、共通の目的意識のもと、問題解決に向かって、自ら意欲的に問題がかかわり、解決、実践していくという一連の活動過程を踏まえた指導が、一層、重要な意味をもってくる。以上のことから、本年度は、

- ① 学校・学級生活を充実、向上させる問題に気づき、その問題に自分を深くかかわらせ、解決しようとする意欲や態度を育成すること。
- ② 活動を通して、自分のよさを自覚するとともに、そのよさを学校・学級集団の中で認め合い伸ばしていける場の設定と展開の在り方を工夫すること。
- ③ 共通の目的意識をもった活動過程を通して、互いの活動や役割を認め合い、励まし合える人間関係を育成すること。
- ④ 問題解決の活動過程で必要とされる思考力、創造力、判断力、表現力、実践力を育むこと。などが大切と考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ 一人一人が互いの考えを大切にし、 共に活動しようとする意欲や態度を育てる支援のあり方

(学級活動下学年分科会)

1. 主題設定の理由

下学年の児童は、自分の興味や欲求に応じて即時的に自分の考えを言ったり、行動したりする時期である。これは、それぞれの子どもたちの自分らしい考えや行動の素直な姿とも言えるし、自己中心性に基づく言動の表れでもある。また、この時期の子どもはまわりの他人（特に学校では教師）から認められたいという欲求が強く、ほめられることによって望ましい行動を進んでとるようになる。そして、そのまわりにいる子どもたちも相互に影響し合い同様の行動をとる傾向が強い。

そこで、子どもたちに互いのよさを見つける目や態度を培うためには、まず教師が、子どもたちの個々のよさ（発想のよさ、表現のよさ、かかわり方のよさ、行動のよさなど）とは何かを語り、それに基づく具体的な姿をたくさん見付け、それを子どもたちに、学級活動の各場面に応じて提示し、共通理解しあうことが大切である。また、どのような意見や考えでも、それを肯定的に受け止める態度を養うことにより、望ましい学級の雰囲気が出ていく。そして、子どもたちの多様な考えを生かして計画された活動を、ひとつひとつ積み重ねていく過程で、一人一人の子どもは満足感や成就感を感じ、協力して活動するよさや楽しさを実感できるものであると考える。

下学年分科会では、児童相互の豊かなかかわり合いを大切にしたいと話し合いや集会活動を通して、互いの能力、考えなどを十分に発揮し合い、下学年なりに、認め合える人間関係を培いたいと考える。また、児童一人一人が、自分の考えを出したり、役割を果たしたりして活動することのよさや楽しさを数多く体験することで、主体的な話し合いの態度や実践的な態度が育っていくものと考えた。そのために、教師が、題材に応じ、場に応じ、個に応じて、どのような支援を計画し実施していけば良いかを中心に研究を進めることにした。

なお、本研究を進めるにあたり、分科会では「支援」を次のように考えることにした。

本来もっているよさや可能性を児童自らが発揮するのを助け、うながし、それをのばしていくために教師が行う様々な教育的手立てのことを支援という。

2. 研究仮説と仮説検証の視点

児童一人一人にとって、学級の中で自己の存在が尊重され、自分がなくてはならない存在として意識できることは重要なことである。その中で認められるからこそ、児童は安心して活動ができる。さらに、互いに認め合う活動を展開することにより、集団に対する帰属意識や存在感が生まれるのである。

互いが認め合える学級にしていくためには、まず一人一人が自分らしさを発揮できるような場を意図的に設定することが大切である。また、教師が児童の表現や活動を温かく見守り、共感的に受けとめ、効果的な支援をしていくことによって、児童の一人一人に活動する楽しさを味わわせることができると思う。

そのような体験を具体的に積み重ねていくことにより、一人一人の児童に力を合わせて活動しようとする意欲や態度が育つと考え、研究仮説を以下のように設定した。

研究仮説

互いの考えを認めあえる場や方法を工夫し、活動する楽しさを味わえるような支援をすれば、一人一人の児童に、学級生活の向上をめざして力を合わせて活動しようとする意欲や態度が育つ。

〈仮説検証の視点〉

視点1 自分らしさを発揮し、互いに認め合う場や方法の工夫

ア. 表現方法の工夫

○自分の考えを持ち、意見の交流をはか
るために、学級活動カードを活用する。

イ. 小集団の活用

○議題により小集団の編成を工夫
し、より自分らしさを発揮でき
るようにする。

視点2 集団活動の楽しさが実感できる活動内容の工夫

ア. 議題選びの工夫

○友達の願いを知り、共
に考えることができる
ようにする。

イ. 一人一人が活躍でき る場の工夫

○自分の役割を果たし、
互いに関わりあいなが
ら、楽しさを実感でき
るようにする。

ウ. 評価の工夫

○振り返りカード
で、互いのよさを
認めあえるよ
うにする。
○教師が評価の観
点を明確にする。

3. 研究内容 (1)実践事例 1年 議題「1の1まつりをしよう」

視点1 《自分らしさを発揮し、互いに認めあう場や方法の工夫》

手だて 「表現方法の工夫」㊦短冊型の考えカード ㊧絵や具体物の活用

㊦では、一人一人の児童が、「自分は、こんなお店をやりたい」という意欲をもって、話合いに参加できるように、短冊型の考えカードを用意し、事前に書かせた。それを掲示することにより、互いの考えにも気づかせるようにした。また、㊧では、話すことが得意でない児童でも、自分らしさが発揮できるように、お店の絵を描いたり、売りたい物を作ったりするような、それぞれに合った表現方法を工夫した。

「小集団の活用」㊨店ごとのグループでの活動

次に、店ごとのグループに分かれて、店の名前を相談したり、看板を書いたりする具体的な作業を取り入れて、どの児童も主体的に活動に参加するようにした。

授業の概要 本時は、㊩どんなお店やさんをだそうかな㊪なりたいお店やさんにわかれようの二つを話合いの柱とした。㊩では、お店でやりたいものや売りたいものの絵や具体物を見せながら発表させた。㊪では、それぞれなりたい店のところに、自分の名前カードをはらせた。そして、人数が極端に少ない店は、いっしょにまとめるなどして、全部で7つの店が決まった。その後、店ごとに集まり、お客さん



がたくさん来てくれるような楽しい名前をつける相談をして、看板作りをした。終末の児童全員による「ピカイチさんの発表」では、「〇〇君の作ってきたものが、本物のパンみたいでした」「一度も発表していなかった〇〇君が言えて、すごかったです」等々、互いを認める場面が見られた。

考察 事前に、自分のやりたいことを絵や具体物に表すことによって、1の1まつりをやりたいという期待感を刺激し、意欲が更に増幅した。話合いでは、普段、話すことが得意でない児童も絵や具体物を用いて生き生きと発表できた。そして、それに対する驚きや賞讃の声が周囲の児童から上がった。小集団に分かれて活動する場面では、互いに関わりあいながらどの児童も楽しそうに取り組んでいた。このことから、考えをもてない児童にとっては、事前に、考えカードをもたせたり、具体物を示しての発表は、意欲をもたせるために大変有効なこと、また、小集団での活動は、どの児童も生き生きとし、互いのよさを発見できる場であることの2点を確信した。

(2) 実践事例 2年 議題「学級の旗をつくろう」

視点2 《集団活動の楽しさが実感できる活動内容の工夫》

「議題選びの工夫（議題の共有化）」

手だて これまでの話し合い活動は、発言力・集中力のある児童が中心となって進められるという傾向にあった。そこで、クラス全員の児童が、互いの願いを知り、共に考えていこうとする気持ちになるように、話し合う議題について、十分な共通理解を図ることを「議題の共有化」と捉え、次のような手だてを考えた。⑦事前に「どんな時に使おうか」・「どんな気持ちを込めようか」と投げかけ、旗づくりへの意欲を高めるようにした。⑧児童が進んで描いてきた図案を教室に掲示し、「自分も描いてみようかな」「どんな絵（文字）がクラスの旗に合っているだろう」という、興味・関心が自然と湧いてくるようにした。

授業の概要 本時は、①事前に図案を描いてきた児童が、その図案に込めた気持ちを発表することにした。普段は、なかなか人前で自分の気持ちを言えない児童のために、発表する時は7人ずつ前に出て、図案を見せながら、一人ずつ気持ちを述べるという方法をとった。②友達の図案のいいところさがしをした。「〇〇ちゃんの図案は、2組の青色をいっぱい使っていて、外に出たときに目立つからいいと思います。」などの意見が出て、事前に話し合ったことが目安になり、話し合い活動がねらいにそって、具体的に展開された。③どんな図案の旗にするかを話し合い、4枚の図案が選ばれた。

考察 この議題が提案され、話し合うことに決った当初は、「クラスみんなで旗をつくろうよ」というところまで、クラスの雰囲気は盛り上がっていなかった。朝の会、帰りの会などを利用し、旗をつくる目的、活用の仕方、さらに旗の形や大きさなど個別的、計画的に具体的な話し合いを進めていくうちに、次第に旗づくりへの興味・関心が増していった。また、進んで図案を考えてきた児童の作品を教師からのコメントを添えて提示したところ、絵を描くことに苦手意識を持っていた児童の気持ちを刺激し、自分も描いてみたいと言って、5枚の図案を描いてきた。図案の掲示は、議題への関心を高め、互いに認め合う契機となり、有効であった。話し合いの方向が、15枚から4枚への選択となった時、みんなの考えを生かすにはどうしたらいいかなという教師の助言を行い、その後の話し合いで、15枚のよいところを少しずつ取り入れることになり、後日遠足で楽しく活用する事ができた。



4. まとめと今後の課題

「一人一人が互いの考えを認め合える場や方法の工夫」, 「活動する楽しさを味わえるような支援」を通して研究テーマに迫ってきた。本研究から、主に以下の点が明らかになった。

(1) 研究のまとめ

① 自分らしさを発揮し、互いに認め合う場や方法の工夫

- 「学級活動カード」に自分の考えを書かせることにより、児童は自分なりの考えをもち、積極的に話し合いに参加でき、意見の交流を図ることができた。
- 絵や図、動作化を題材に応じたり、児童に応じたりして適宜取り入れることにより、生き生きと自己表現できる児童が増えた。
- 目的に応じた多様な小集団を組織することにより、児童は自分の考えを安心して表現でき、より自分らしさを発揮し合い、それぞれのよさを互いに認め合うことができた。

② 集団活動の楽しさが実感できる活動内容の工夫

- 学級の中に学級活動コーナーを設定し、話し合いたいことを掲示することにより、共に考えようとする意欲や態度が育ってきた。
- 一人一人が、自分の役割や活動できる場をもつことで、集団の一員としての自覚が育ち、活動への意欲が高まり、やり終えた成就感を味わうことができた。
- 「振り返りカード」を活用することにより、互いのよさを見付け合うことができた。また、他の活動への意欲を引き出す引き金となった。
- 終末の助言の中で、視点をもって一人一人を具体的に賞讃し励ますことによって、児童が自信をもち、意欲的に活動をするようになった。

(2) 今後の課題

- 一人一人が互いの考えを大切に、共に活動しようとする意欲や態度を育てる支援の在り方を工夫してきたが、個々の場に応じて、きめ細かなみとりや手立てが必要である。児童が生き生きと活動するための支援については今後も検討を続けなければならない。
- 全体の場ではなかなか自己表現できない児童のために、小集団の構成や話し合いの方法が効果的であることは実践の範囲内で明らかとなったが、さらに研究する必要がある。
- 活動に応じて評価の観点を設定し、児童のよさを具体的に見取り、指導に生かしていくことが大切である。

Ⅲ 一人一人が個性を発揮し、 互いを高め合う学級活動の指導の工夫（学級活動上学年分科会）

1. 主題設定の理由

上学年の多くの児童は、学級活動を通して自分がどのように成長してきているのか、集団の中でどのように認められてきているのかを知りたいと願っている。そして、自己の体験をもとに、互いに協力して学級生活の充実・向上に向けて意欲をもって積極的に活動する児童もいる。しかし、一般的に学級の諸問題を自分の問題として捉え、学級生活の充実・向上を目指し、集団活動を通して他との望ましいかかわりがもてる児童を育成するためには一層の工夫が必要である。

また、これからの学級活動では、児童のよさを伸ばすことが大切である。そこで、本分科会では、児童のよさを「児童一人一人の思いをはじめ、思考や判断、表現など、まわりからも共感されるような内容や傾向」と捉え、児童の「可能性」も含めて、「個性」と考えた。

ところで、個々の児童のよさを伸ばす学級活動の指導上の問題点として、次の二点があげられる。一つは、話合いや実践の活動で目立って活動する児童については、よさや可能性が明らかになりやすいが、その他の児童のよさや可能性を伸ばすためにどのように支援していったらよいか手だてが必ずしも明らかでない。二つには、児童は個々の学級活動においてある程度の成就感・満足感を得てはいるものの、その体験を通して得たことを次の活動へと継続、発展させていく場の設定や展開が十分ではないということである。

児童は、本来楽しく充実した生活を送りたいという願いをもった存在である。学級活動においては、学級の児童一人一人の思いや考えを、教師の温かい支援のもとに児童が相互に認め合い、具体化し、実践化していかなければならない。一人一人の児童は、その中で得た成就感・満足感をもとに自分のよさに気づき、意欲をもって活動するようになり、集団の一員として自信を持って生活していくことができる。そこで、上学年としては事前・事後を含めた活動において、児童一人一人がよさを発揮しながら、集団の中で互いに認め合い・高め合えるようになるための支援の在り方を考えていくことにした。

以上のような理由から、主題を設定した。

2. 研究の仮説と仮説検証の視点

一人一人の児童が、よさを認識し、それを学級生活の中で発揮していくためには、「自分は、先生や友だちから認められている」といった意識を持てることが前提となる。この意識

は、学級活動が集団の活動である以上、教師の評価や児童が互いを認め合う活動を通して高まっていくものである。そこで、めざす児童像を「集団の中で自分のよさや可能性を発揮し、自他を尊重しながら主体的に活動する子ども」と考え、学級内の諸問題の解決への意識・意欲の向上を根底に、互いのよさを生かし、認め合い、高め合う集団活動をめざすために次のような研究仮説を設定した。

研究仮説

学級活動において、諸問題を解決しようとする意識を全員がもてる場の工夫と一人一人のよさを認め励ます評価をすれば、個性が発揮され、互いを高め合うことができるであろう。

<仮説検証の視点> 視点1 諸問題を解決しようとする意識を全員が持てる場の工夫

ア. 諸問題の原因を探る場の設定	イ. 提案理由を全体のものとする場の設定
主に事前指導が中心となる。解決するとどのようないいことがあるのか、なぜ解決しなければならないのかなどを考え、議題の価値そのものを高めていく。	議題の提案理由について、あらかじめ思うことなどを考える場を設定し、学級の成員が同じ立場で話し合いを始められるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会や帰りの会などを利用して、議題について全員で話し合う機会を持つ。 ・活動したことを振り返る場を設定することで、諸問題の原因を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に知らせ、自分の考えをまとめてから話し合いに臨む。 ・めあてを明らかにして、話し合いの目的を明確にする。

視点2 一人一人のよさを認め励ます評価の工夫

ア. 活動過程の評価の工夫	イ. 自己・相互評価の工夫	ウ. 評価を生かす工夫
事前・事後指導を含めてねらいやよい点についての評価を行う。	学級活動カードを活用して自分の考えや感想、友だちや自分のことについて記入できるように工夫する。	終末の評価を次回の活動につなげるため、児童の目に触れるように工夫する。
<ul style="list-style-type: none"> ・評価の観点を明確にし、活動を具体的に認め励ます。 ・活動に見通しを持たせ、事後に、流れに沿った評価をする機会を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・記入したものを発表し合う時間を話し合いの終末に設定する。 ・よい発言について記入する欄を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が記入したカードを教室内に掲示する。 ・学級新聞や学級通信などに、教師の評価や児童の感想などを記事として掲載していく。

3. 研究内容

(1) 視点1「諸問題を解決しようとする意識を全員が持てる場の工夫」の実践事例

5年 10月議題「5年3組の歴史を作ろう」

ア. 諸問題の原因を探る場の設定

学級の親和性を高め、学級全員が仲良く楽しく過ごすためにはどんな活動をしていかを考えさせてきた結果、話し合いたいことを議題箱に入れる児童が増えてきた。しかし、内容を見てみると、学級をよりよくしていこうという意識は感じられるものの前学年までの経験に基づくものが多く見られた。そこで、今まで以上に学級生活を見つめ、問題を考えたいこうとする意識を持たせていきたいと考えた。

一日を振り返る場の設定

帰りの会で、自分たちが気付いたことを出し合うことの他に、児童一人一人が「一週間の生活」という表に一日の記録をしている。これは、一日の自分を振り返ることができるように、自己評価だけでなく、心に残ったことを書き留めておけるようにしたものである。そこから担任が学級の問題や個々の願いをつかむようにしている。

学期ごとに活動を振り返る場の設定

一学期の終わりに、「みんなで楽しみたいこと」「友達にしてあげたいこと」「学級が困っていること」「みんなで決めたいこと」の4つの観点からアンケートをとり、学級に対する一人一人の願いをつかむようにした。今回は、「一学期にやった〇〇がよかったから、またこんなことをやりたい。」などの声から、今まで自分たちがやってきたことを振り返り、それを歴史としていつでも見られるように掲示していくことで、今後の活動への意欲がより高まっていくのではないかと考え、本議題を設定した。

イ. 提案理由を全体のものとする場の設定

<事前の活動>

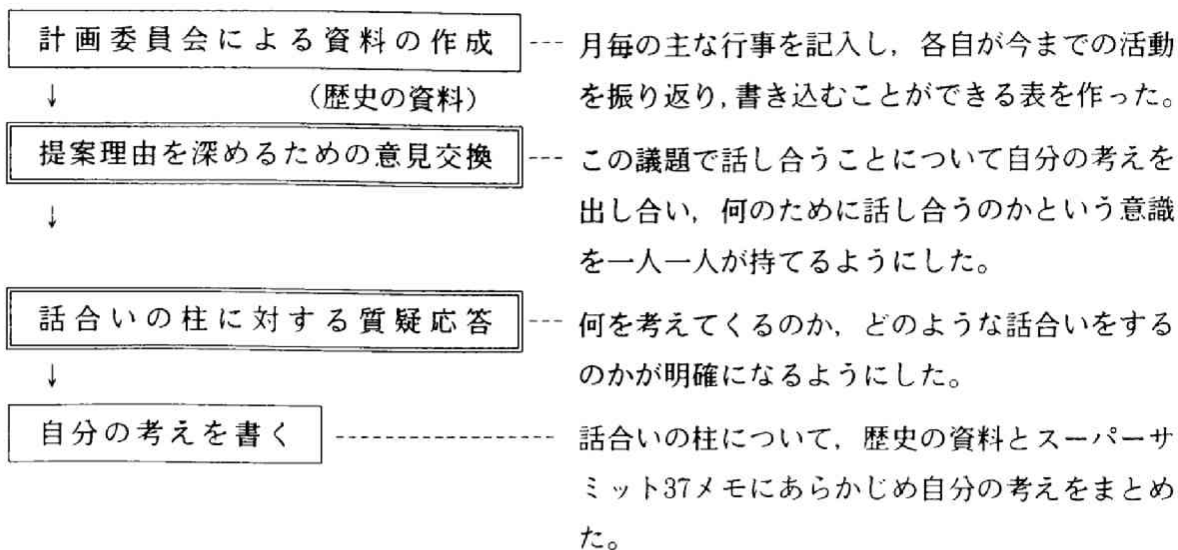
計画委員会による活動計画書とスパーサミット37メモを作成

役割分担と当日の話合いまでの見通しを持った。話合いのめあてと柱を決めた。

学級活動コーナーに掲示

話し合うことへの関心を高めた。

	5	10	15	10
5	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう
10	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう
15	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう
10	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう	5年3組の歴史を作ろう



考 察

一人一人が学級の歴史に残したいことを資料に書き込むことにより、歴史作りへの意欲が高まった。また、事前の活動で話し合いの目的や内容について確認することにより、話し合うことが明確になり、話し合いの方向が絞られ、「いつでも見られるようにしたい」「みんながかかわって歴史を作りたい」など、めあてにそった意見を中心に話し合いが活発に進められた

今後は、計画委員会で決めていた「話し合いのめあて」を、議題（提案理由）について意見交換する中で全員が話し合っていけるよう考えていきたい。

(2) 視点「一人一人のよさを認め励ます評価の工夫」の実践事例

4年 10月議題「どんぐりさんと秋祭りしよう」

ア. 活動過程の評価と工夫

話し合いの中で、自分のよさを発揮し、認め合う工夫として、活動過程にそって、計画的に評価（事前・事後指導を含）を取り入れることにより、みんなのものとなるように見通しを持たせ、認め励ましていった。事前指導では、提案理由・めあてを何日か前に学級活動コーナーに掲示をする。個人では、めあて・考えを記述しておき、参加意欲を高めるようにした。

本時では、終末の反省で、自己相互評価をし、お互いのよい所やがんばった所を認め合った。

よい発言の観点

1. 友だちの考えをもとにして、自分の考えをはっきりと、わかりやすく発言している人
2. 話し合いを進めるような発言をしている人
3. 提案理由・めあてを考えながら発言している人
4. 前の経験を生かした発言をしている人
5. 友達の考えを助けている発言をしている人

イ. 学級活動カードの活用

互いのよさを認め合い、励まし合い、高め合うために、『学級活動カード』を活用し、カードの中に「個人のみあて」「感想」(自己評価)、「今日のがんばりさん」(相互評価)の記述欄を設けた。カードは計画委員が作成。

ウ. 評価を生かす工夫

評価を生かす工夫として、本時で評価したものに教師の評価(全員分)を加えて掲示し、お互いのよさを更に認め合い、次回の意欲へとつなげていった。また、相互評価を行う際、児童一人一人の見る目を育てるために「よい発言の観点」を考えた。

授業の概要

議題箱の中に、「どんぐりさん(心障学級)と交流をしよう」「秋祭りをしよう」「ゲーム大会をしよう」が入っていた。みんなで話し合った結果、全員の意見を生かそうということで、本議題「どんぐりさんと秋祭りしよう」に決定した。話合いの柱を3つ(①何をしたいか。——事前にアンケートをとり、まとめあったので『お店やさん』とすぐ決まった。②どうやるか。——グループを作ってお店の内容を決めることにした。③グループ作り——心障学級の児童が4人、売り手と買い手の人数を考えて、4グループと決めた。)とした。終末の反省では、学級活動カードの話合いの反省をし、感想・今日がんばりさんを記述した。そして、司会より今日のがんばりさんの発表をした。先生の話では、「提案理由・めあてにそった発言」「全体のことを考えている発言」「計画委員のがんばり」など認め励ました。

考 察

自己・相互評価を一時間毎に記述し、よさを見つけ発表した。より多くの人の目に触れ、互いに見合うために、児童の感想と先生の話は、掲示したり、学級新聞に載せたりした。それによって、自分は他の人から認められていると感じ、満足感をえることができ、主体的に活動できるようになってきた。相互評価では、「〇〇さんが何回発言した。」「大きい声で言えた。」など技術的な発言が多かったが、見方を指導していくうちに、「友達のことを考えた発言をしていた。」「司会を助けていた。」など発見できるようになってきた。

議題箱		議題	役割	めあて	提案理由	議題
5	4	3	2	1	分班	議題
5	4	3	2	1	分班	議題
5	4	3	2	1	分班	議題
5	4	3	2	1	分班	議題

今日の話し合いの反省
 1. 話し合いの目的を明確にする
 2. 話し合いの場を確保する
 3. 話し合いのルールを守る
 4. 話し合いの結果をまとめる
 5. 話し合いの振り返りをする

今日のがんばりさん
 1. 話し合いの場を確保する
 2. 話し合いのルールを守る
 3. 話し合いの結果をまとめる
 4. 話し合いの振り返りをする

4. まとめと今後の課題

本分科会では、集団の中で自分のよさや可能性を発揮し、自他を尊重しながら主体的に活動する児童を育てていくために、「諸問題を解決しようとする意識を全員が持てる場の工夫」と「互いのよさを認め励ます評価の工夫」が必要であると考えた。検証授業の過程で、以下のことが明らかになった。

(1) 研究の成果

視点1 諸問題を解決しようとする意識を全員が持てる場の工夫

- 学級生活の諸問題について話し合ったり、振り返ったりする場を設定したことで、学級生活を向上させる問題に気付くようになった。
- 提案理由に対する意見交換を行う場を設定することで、議題に関する児童の願いや考えが明らかになり、話し合いのよりどころとなった。また、話し合いが停滞したり、混乱したりしそうになった時など、提案理由にもどって話し合っていることを整理し、進められるようになった。

視点2 一人一人のよさを認め励ます評価の工夫

- 相互評価、自己評価の場を設け、互いのよかったことをカードに記入したり、話し合いの終末で発表し合うことで、互いのよさに気付くようになった。
- 「よい発言の観点」に気付かせることで、互いのよさを具体的に認めあえるようになった。
- 終末の助言では、児童のよさを見つけ、具体的な場面を示しながら話すことで、以後の活動への意欲が高まった。
- 児童が記入したカードを「学級活動コーナー」に掲示したり、「学級新聞」に掲載したりすることで、次の活動にも意欲的に取り組むようになった。

(2) 今後の課題

- 諸問題の原因を探るために、話し合う時間を朝の会や帰りの会に設定してきたが、短時間で効率的に展開する方法を工夫する必要がある。
- 話し合い活動の終末に互いのよさをカードに記入する時間を設定しているが、時間の確保が難しいことがあった。そこで、活動計画を立てる段階で、この時間の確保のために、話し合いにおける時間と内容のバランスを一層工夫する必要がある。

IV 互いのよさを認め、

一人一人が意欲的に活動する代表委員会の指導の工夫

(児童会活動分科会)

1. 主題設定の理由

児童会活動の目標は、児童が自分たちの学校生活を向上させようとする意図の下に、学校生活に関する諸問題を解決する活動及び学校内の自分たちの仕事を分担処理する活動を自発的、自治的に行うことによって自主性と社会性を養い、個性の伸長を図ることにある。また、学級を単位とする学級活動とは異なり、学校の全児童が参加して活動が進められる。それぞれの学校が実態に応じて創意工夫し、それを学校の伝統にまで作り上げていく活動ともいえる。

その活動の一つである代表委員会活動は、各学級等の代表者で構成され、全校児童の意向を反映しながら、学校生活の充実向上のための諸問題を話し合い、協力して解決を図る自主的、自発的活動である。異年齢集団でもある代表委員会では、一人一人の児童が共通の課題意識をもち、それを解決するために話し合い、その結果を実行する過程において、異学年の交流が図られたり、互いのよさを発揮し、認め合ったりして、上述の目標を達成することが期待できる。

しかし、代表委員会における児童の実態としては、自分に与えられた仕事は果たすが、進んで問題を見つけ、自主的に仕事を分担し、工夫しようとする意欲は不十分な場合が多い。また、高学年中心で話し合いが進められ、中学年の意向が十分反映されず、異学年の協力した話し合いにまで高まらないことも多い。

代表委員会の活動が活発になり、充実したものになるためには、活動の基盤となる話し合い活動が、異学年児童の集まりを生かして十分に展開されなければならない。代表委員会の活動を活性化することは、児童会全体の活動を活性化することにつながり、全校児童の関心が高まれば、それがまた代表委員一人一人の活動への意欲にもつながると考え、本主題を設定し研究を進めることとした。

2. 研究仮説と仮説検証の視点

(1) 研究仮説について

代表委員会の特質として第一に挙げられることが、異年齢の集団であるということである。4年生から（場合によっては3年生から）6年生までが、一同に会し、議題として出された課題を解決していかなければならない。4年生と6年生では発達段階から考えて、

いろいろな面で違いがある。この集団が常に生活を共にしているのなら、たとえ異学年であっても集団として高まっていくことも容易であろうが、代表委員会では、月に1回の活動という時間的な制約がある。限られた回数の中でどのように集団としての機能を高め、課題解決に取り組んで行ったら良いのであろうか。その手がかりをつかむために研究授業と、実態調査を行った。

その結果、代表委員会活動の問題点の一つとして、中学年児童の話合いへの参加の仕方がクローズアップされた。中学年の児童が代表委員会の話合いにおいて内容的、方法的に主体性が発揮しにくい状態にあることがわかってきた。5年生6年生中心に話合いが進められ、3年生4年生はただ黙って話合いの進行を見つめるという傾向が多いようだ。したがって、中学年の児童が、代表委員会という集団に参加し、「議題を共に解決しようとしているんだ」という意識は現状ではあまり高いとは言えない。

5年生6年生ばかりが発言をしていて、中学年は話合いに参加しにくい代表委員会から、一人一人が意欲的に活動し、自分は役にたったという有用感、成就感を実感できる代表委員会へと変えていく手だてを具体的に明らかにしていく必要がある。そこで以下のような仮説のもと研究を進めることとした。

一人一人の児童が課題意識を明確にもち、互いの意見や考えを認め合える話合いとなるように支援をすれば意欲的に活動する代表委員会になる。

この仮説の中には大きな要素として、次の2つのことが盛り込まれている。それは、「課題意識を明確に持つこと」と「互いの意見や考えを認め合うこと」、言い換えれば互いのよさを認め合うことである。この2点について支援をしていけば研究主題に迫ることができるという見通しを立てた。そこでこれを仮説検証の視点として実証授業を進めることにした。

(2) 仮説検証の視点について

【視点1 「課題意識を明確にもたせるための支援」】

代表委員会の話合いが低調であることの原因の一つが、「議題を解決しよう」という課題意識がうまくもてていないためではないかと考えた。中学年の児童が高学年の児童と同じレベルの課題意識をもつことを望むのは、発達段階から考えて無理もあるので、中学年には中学年なりの、高学年は高学年なりの課題意識の持ち方を探っていくことにした。そして、それぞれの児童が課題の解決に向けて、自分がなにをすべきかということを確認に

意識して代表委員会に臨むことで、より活発な活動が展開されるものと考えた。そのため
の支援として、以下のような具体的な手だてを考え、検証を進めることにした。

【課題意識を明確にもたせるための支援】

- ・ 議題集めの工夫
- ・ 話合いの意欲が持てる議題の選択
- ・ 議題伝達の工夫
- ・ 代表委員会カードの利用
- ・ 活動計画の工夫
- ・ 助言の工夫
- ・ 環境づくり

【視点2「互いのよさを認め合わせるための支援」】

代表委員会の活性化を妨げるもう一つの要因として、異学年間の交流の少なさを挙げる
ことができる。代表委員会が月に1回ということもあり、中学年の児童が代表委員会に参
加している様子を見るとかなり緊張しているのがわかる。緊張があれば自分の考えを表現
することにも消極的になり、結果として沈滞ムードが漂ってしまう。どのようにしたらこ
の緊張が解け、子供達が伸び伸びと自分の考えを表現し、活動を進めていけるのであろう
か。そのもっとも大切な要件が、集団の中に受容的な雰囲気があること、言い換えれば互
いのよさを認め合える集団であることであろうと考えた。このような集団に育てていくた
めに以下のような支援の手だてを考え検証してみることにした。

【互いのよさを認め合わせるための支援】

- ・ 座席配置の工夫
- ・ 代表委員会カードの利用
- ・ 中学年にもわかるような話合いの仕方の指導
- ・ 助言の工夫
- ・ 板書の工夫
- ・ 少数意見の尊重

3. 研究内容

実践事例1 議題「運動会のめあてを知らせる工夫をしよう」

実施計画の工夫

視点1〔課題意識を明確にもたせるための支援〕

運動会のめあてを議題にする授業は、本分科会では2回目である。今回は、運動会のめあてを決めることを中心に話し合いを進めた。その結果、各クラスから出された意見を1つにしばっていく話し合いになり、多くの意見を生かすことができなかった。また、高学年の出した意見にかたよる傾向もあり、代表委員会の議題としてふさわしいかどうかという課題が残された。そこで、今回は、計画委員会で募集しためあてを組み合わせ運動会のめあての原案を出すことにした。そして、話し合いの柱を「①めあてを決める」「②めあてを全校に知らせる工夫を考える」「③係分担をする」とし、話し合いの中心が②になるような活動計画を立てた。全校に知らせる工夫の話し合いは、めあてを決める話し合いとは異なり、いろいろな考えが生かされる話し合いである。したがって、代表委員一人一人の考えが広く生かされ充実感のある話し合いになると考えた。

授業の概要 まず、運動会のめあてについて、計画委員会の原案をもとに話し合いが進められ、原案を修正した形でめあてが決定された。次に、めあてを全校に知らせる工夫について話し合い「窓に大きくめあてを書いてはる」「ポスターをはる」「放送でながす」「手紙で知らせる」「1、2年生に伝えに行く」等の意見が出された。できる範囲であれば、いくつでも決めてよいということを確認し話し合いを進めたが、児童は、一番良いものを選びようとする話し合いになりがちで何度か助言した。最後に、必要な係を決め仕事を分担した。

考察 計画委員会が運動会のめあての原案を出すことにより、話し合いの焦点がしぼれ、短時間でめあてを決定することができた。話し合いの中心をめあてを知らせる工夫にしたことで、1つ1つの意見を肯定的にみることができ、互いの意見を認め合うことが

できた。3、4年生も活発に意見を出し意欲的に話し合いに参加した。実施計画を工夫することで、一人一人の児童がその学年なりの課題意識を明確にもつことができたと言えるであろう。



実践事例2 議題「校内体育大会の計画を立てよう」

座席配置の工夫

代表委員会カードの利用

視点2〔互いのよさを認め合わせるための支援〕

発言者も話し合いの方向も6年生中心になるという問題を解決するために、座席の配置を工夫した。3、4、5、6年生で一つの小グループを形成し、3、4年生をはさむ形で、両端に5年生と6年生を座らせた。話し合いが行き詰まったり、発想を広げたり、考えを深めたりするときなどグループ相談を取り入れた。そして、中学年にも議事進行が理解できるように高学年が説明したり中学年の考えを引き出すようにしたりして、中学年にも発言できるようにした。

代表委員会カードには、『今日のなるほど君・さん』の欄を作り、話し合いの途中でもなるほどと思った発言をした子の名前を記入してもよいとし、主体的に友達のよさに気付くようにした。そして、話し合いの後に『今日のなるほど君・さん』を発表し、互いのよさを認め合えるようにした。

授業の概要 同議題で2回目の話し合いである。司会が5年生（輪番制）で初めての経験だったため進行は遅々としていたが、かえって考える時間が十分に確保されたようである。今回の柱立ては①競技種目の確認②盛り上げる工夫③係分担とし、②を中心に話し合いが進み、小グループの話し合いも数多く取り入れた。例えば、盛り上げる道具が決まった後で、“各自自由に作る”か“兄弟学級で同じ物を作る”かがなかなか決まらず、小グループの話し合いをさせたが、3、4年生も発言し、6年生はよく考えて理由を述べ、意見が深まった。

考察 異学年による小グループの話し合いは、今回が3度めであった。グループによって違いはあったが、6年生がリードし、発言の割り振りをしていたところもあった。また、普段はおとなしい6年生が最上級生としての自覚をもち、進めようとしている姿も見られた。この小グループの話し合いは、回数を重ねることによって、交流が深まると考える。話し合いの後、上学年に励まされて挙手をした3年生もいた。

『今日のなるほど君』はこの時間が初めてではあったが、意図をよく理解し理由も具体的に述べていた。賞賛された子の笑顔が印象的であった。その後の終末助言で、重ね認められた児童も多く、互いのよさを認め合わせるためには、有効な手だてであった。



実践事例3 議題「収穫祭を盛り上げる工夫をしよう」

中学年にもわかるような話し合いの仕方を指導

視点2 「互いのよさを認め合わせるための支援」

高学年、特に6年生には、4年生のことを考えて本時の話し合いを進めるように事前に指導をした。中でも、小グループ内で4年生になるべく発言させること、全体での話し合いでの内容が分かっているか確認することは強調して指導した。

授業の概要 本時は、上記の議題について活発に意見交換がなされた。その中で4年生が、見当違いだと思われる意見を出した。ところが、その意見をただ見当違いとして受け止めず、話の内容を十分理解していない為ではないかという意見が出された。また、司会グループも内容の確認を行い4年生も安心した様子で話し合いに参加することができた。

考察 今回のような発言がでたことによって4年生は安心して話し合いに参加し、小グループでの発言もみられた。また、他学年も人の意見をよく聞きその内容を考えることができた。このように考えると、異学年のことを考えさせるような支援は、互いのよさを認め合わせる為に有効だと考えることができる。

4. まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

- 事前に各自の考えを記入しておけるように早めに代表委員会カードを配布したことにより、課題意識を持って代表委員会に参加させることができた。特に3、4年生には「必ず発表しよう」という部分をカードに設け、意欲づけたことにより、話し合いへの参加態度が積極的になってきた。また、「今日のなるほど君・さん」の欄を設け、記入し発表することにより、互いのよさを認め合う雰囲気が徐々に醸成されてきた。
- 異学年の小グループで話し合う場を設けたことにより、中学年の児童にとって集団の圧力を意識せずに、より自分の意見を発表しやすくなったようである。また、高学年児童は中学年の意見を引き出そうと努力する姿勢が育ち、高学年としての役割意識が高まった。
- 終末の助言で、話し合いの中の具体的な場面を取り上げ、良い発言をした児童の名前をあげて誉めることが、児童の意欲を引き出すには有効な手だてであることが確認できた。

(2) 今後の課題

- 代表委員会の話し合いの活性化を通して、児童会活動全体の活性化をねらってきたが、代表委員以外の児童の、活動に対する理解や関心の高まりはまだ十分ではない。全校児童の関心を高め、代表委員の活動意欲につなげるようにすることで、全体の意識向上をさらに図ることができる。そのための手だてを具体的に検討していく必要がある。

V 互いのよさを生かし、協力して活動することの楽しさを味わう

健康安全・体育的行事の指導の工夫——運動会の指導を通して——（学校行事分科会）

1. 主題設定の理由

今日の児童がかかえる問題点のひとつとして、与えられた課題や仕事に対してはまじめにやり遂げるものの、自分で考え進んで行動しようとする意識や態度が不足している点が指摘されている。また、互いに協力してよりよい生活を築こうとする態度も十分に身につけているとは言えない。

本分科会が研究を進める学校行事の場面においても、主体的に参加するというよりも、「やることになっているもの」、「先生が決めたとおりにやるもの」と考え、児童一人一人が目的を明確にもてないまま活動していることがある。その結果として、ややもすると全体で協力して行事に取り組もうという意識が希薄となり、自分や自分が所属する集団の生活をよりよくしようとする態度が育たないという実態が見受けられる。

あらためて言うまでもなく、学校行事の目標の一つは、「行事に積極的に参加させ、日常の学習成果の総合的な発展を図るとともに、学校生活を楽しく豊かなものとする」ことである。楽しさを味わうには、友達に信頼されたり認めてもらったりするなどの人間関係の深まりや広がりが必要である。そして、よりよい人間関係を築くためには、児童一人一人が、自分のよさを生かしながら、互いに助け合い、協力し合えるようになることが大切であると考え、本分科会の主題を設定した。

また、主題に迫るために、児童が相互に関わり合える場が比較的多いと思われる健康安全・体育的行事、中でも楽しみが多く期待感も大きい運動会を取り上げ、その事前・事後指導の在り方について研究を進めることにした。

2. 研究仮説と仮説検証の視点

研究仮説

互いのよさを生かし、協力することの楽しさを味わわせるためには、児童の活動場面に
応じた支援の工夫が必要である。

分科会の研究主題を達成するためには、児童に対する教師の適切な支援が必要であろうと考え、①活動意欲を高めるための支援の工夫、②協力することの楽しさを味わわせるための支援の工夫、の二点を研究仮説の視点として設定した。そして、それぞれの視点にいくつか

の手だてを設け、事前・事後指導の中で明確にすることにより、主題に迫ろうと考えた。

なお、本分科会では、『支援』を「子どもが主体的に活動するために必要な教師の手だて」ととらえた。

3. 研究内容

(1) 事前・事後の指導における支援の事例

「児童の自発的・自治的な活動を特質とするものではない。しかし、児童を行事に積極的に参加させる」という学校行事の特質をふまえるためには、児童の活動場面に応じた支援の工夫が、参加の意欲を高め、協力して成就させることの喜びを味わわせることになると考え、次のように具体化した。

運動会 事前・事後指導における支援の事例

	視点1 活動意欲を高めるための支援の工夫		視点2 協力することの楽しさを味わわせるための工夫	
	1～4学年	5, 6学年	1～4学年	5, 6学年
事前の指導 1～2時間	<ul style="list-style-type: none"> 〈めあてのめあせ方〉 ・前年度のビデオの視聴 ・めあてカードの形式 ・めあてカードの掲示方法 〈見通しのもたせ方〉 ・家族や地域への招待状 ・練習経過での自己評価 〈期待感のもたせ方〉 ・種目の予想（身体表現等） 〈役割分担の自覚のもたせ方〉 ・応援の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> 〈めあてのめあせ方〉 ・前年度のビデオの視聴 ・種目がんばりカードの活用 〈見通しのもたせ方〉 ・係の仕事内容の説明 ・カウントダウンポスターの作成 ・地域へのポスター・招待状の作成 〈期待感のもたせ方〉 ・到達カードやはげましカードの活用 〈役割分担の自覚のもたせ方〉 ・係の打ち合わせ ・教師の声かけ、励まし 	<ul style="list-style-type: none"> 〈役割を遂行させる〉 ・組分けやグループ分け ・応援の練習 〈互いに教え合う場の設定〉 ・協力がんばりカードの活用 〈自分の成長に気づかせる場の設定〉 ・がんばりカードの活用と教師の言葉 〈集団の高まりに気づかせる場の設定〉 ・練習中のビデオの視聴 〈がんばった点やよさを認め合わせる〉 ・帰りの会などでの相互評価 	<ul style="list-style-type: none"> 〈役割を遂行させる〉 ・運動会のスローガンの掲示 ・応援の練習 〈互いに教え合う場の設定〉 ・協力がんばりカードの活用 〈自分の成長に気づかせる場の設定〉 ・協力がんばりカードの活用 ・到達カードの活用 〈集団の高まりに気づかせる場の設定〉 ・練習中のビデオの視聴 ・学級のめあての確認 〈がんばった点やよさを認め合わせる〉 ・帰りの会などでの相互評価
事後の指導 1時間	<ul style="list-style-type: none"> 〈期待感のもたせ方〉 ・今後の行事予定を知らせる 〈役割分担の自覚のもたせ方〉 ・ふりかえりカードの活用 	<ul style="list-style-type: none"> 〈見通しのもたせ方〉 ・今後の行事予定の確認 〈期待感のもたせ方〉 ・今後の行事予定の確認 〈役割分担の自覚のもたせ方〉 ・ふりかえりカード ・表彰式 	<ul style="list-style-type: none"> 〈自分の成長に気づかせる場の設定〉 ・ふりかえりカードを活用して自己評価 〈集団の高まりに気づかせる場の設定〉 ・保護者の感想の紹介 ・アンケート結果の紹介 ・作文や感想文の読み合わせ 〈がんばった点やよさを認め合わせる〉 ・よかったさがしカードの活用 	<ul style="list-style-type: none"> 〈自分の成長に気づかせる場の設定〉 ・保護者の感想の紹介 ・アンケート結果の紹介 ・作文や感想文を書く 〈集団の高まりに気づかせる場の設定〉 ・保護者の感想の紹介 ・アンケート結果の紹介 ・作文や感想文の読み合わせ 〈がんばった点やよさを認め合わせる〉 ・よかったさがしカードの活用

(2) 指導の留意点

指導には、朝の会・帰りの会・ゆとりの時間の活用のほか、事前・事後に各1時限の学級活動を設定するよう留意する。また、校舎内外の環境整備をしておくことは、児童に理解を促し見通しをもたせることができると考える。

- ① 行事への期待感や意欲を高めるためにビデオの活用・教師の話・めあてカード等により運動の苦手な児童にもさまざまな運動会への参加の仕方があることを理解させる。
- ② 児童一人一人が自分の役割分担を十分に理解できるようにする。
- ③ 種目・係で成功の見通しをもたせる。
- ④ 種目・係の練習の過程で反省や改善・認め励ます場面を設定してやる。
- ⑤ 教師・父母・地域の声を活用し、安心感と自信をもたせる。
- ⑥ 自らの成長に気づく場面や児童が互いに認め合える場面を設定してやる。

(3) 学級活動における事前・事後指導の実践事例

① 意欲的に活動するための期待感をもたせる事前指導

「運動会へ、ゴーゴーゴー！」（第2学年）

ア. 事例の概要

互いのよさを生かし、協力することの楽しさを味わわせるためには、集団の中の一員として一人一人が意欲的に活動することが前提となるであろう。意欲的に活動するためには、まず運動会に対する期待感を高めることが重要であると考え、昨年度の様子を視聴覚資料に基づきながら想起させたり、今年度の種目を自由に予想させたりすることにした。

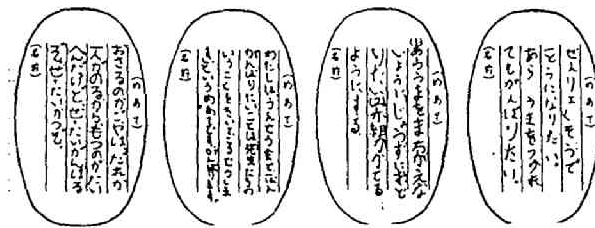
また、意欲的に活動するためには児童に見通しをもたせなければならないと考え、めあてカードの工夫（形態・掲示の仕方・自己評価の方法など）も試みた。

イ. 授業の展開

昨年の運動会で楽しかったことをまとめた思い出カードを、教室内に掲示しておいた。運動会への関心がやや高まったところで、本時では昨年度のビデオを見せ、記憶をより鮮明なものにした。また、昨年度とは内容が異なる「表現」と「団体種目」を取り上げ、身体表現で自由に内容を予想させてみた。その結果、今年度の運動会のイメージがより具体的になり「楽しそうだ！」「早くやってみたい！」という意欲が高まっていった。

次に、玉入れの玉をかたどった紅白のめあてカードを用意し、めあてを記入させた。記入後一人一人に発表をさせ、友だちの考えを知り、互いに励まし合う場を設定した。

運動会終了後、めあてが達成できた場合は、共に掲示するかごの中に入れる予定であることを知らせ、評価に楽しみをもたせた。



ウ. 考察

運動会への期待感を大いに高め、各自が見通しをもって活動に取り組むことにより、練習はもとより、運動会当日も意欲的に参加するようになるということが、今回の指導を通して確かめられた。ただ、「互いのよさを生かし、協力する楽しさを味わわせる」ためには、個人としてのめあてのほかに「協力」を意識しためあてもたてさせる必要があったのではないかと思う。共通のがんばりカードには「協力」の項目を設けたが、意識化が図れなかった。

② 互いのよさを認め合い、今後の学校生活や行事への意欲をもたせる事後指導

「バック・トゥー・ザ・運動会」(第5学年)

ア. 事例の概要

運動会前に事前指導で個人や学級のためあてをもたせ、「協力がんばりカード」や「種目がんばりカード」等を活用して毎日の取り組みに具体的に目標をもたせた。また、初めての経験となる係活動について、その意識や前年度までの活動内容について詳しく知らせることにより、係活動への意欲をもてると考えた。これらの活動を通して児童は、自分たちの種目・演技をはじめ、全校競技・係活動等に意欲的に取り組み、当日も生き生きとした活発な活動が見られた。

運動会終了後、「よかったさがしカード」やアンケート、作文等を活用して、互いのよさを認め合わせることにより、次の活動への意欲を持続して高め合わせる工夫をした。

イ. 授業の展開

運動会に至るまでと当日における自分や学級のめあて、種目への取り組み、係活動についてそれぞれ振り返らせた。上手にできたことやがんばったこと・よかったことをお互いに出し合っていくことで、自分の知らないところでもみんなが一人一人がんばっているのだということを認め合うことができた。さらに、運動会で自分たちが得た力を生かそうと、次の活動に向けて意欲づけをすることができた。

③ 協力がんばりカード

学年 組 氏名 ()				
目標のめあて	個人の努力と協力での勝利を勝ち取る			
協力してやること	各団体標を教える のなにしてかおかわる 喧嘩しあう			
日	月	日	氏名	内容
7	24	5	スズキ	協力
6	25	5	スズキ	協力
5	26	5	スズキ	協力
4	27	5	スズキ	協力
3	28	5	スズキ	協力
2	29	5	スズキ	協力
1	30	5	スズキ	協力
0	31	5	スズキ	協力

ウ. 考察

みんながそれぞれにがんばっているのだということを確認し合うために、事後指導は重要な意味をもつ。この活動により、互いのよさを認め合うとともに、みんなで協力することの大切さを実感し、今後の学校生活や行事への意欲が高まったことを確かめられた。

学校行事後の事後指導はとかく削られがちである。多くの時間を割くことは他の教育活動にも影響を及ぼす。しかし、活動の成果を児童相互が十分に認め合い、次の活動への意欲を高めるには、事後指導を含めた指導計画の立案が大切であり、次の学校行事や日常生活につながるような連続性を持たせる支援の工夫が必要であることも確認できた。

4. まとめと今後の課題

児童の活動場面に応じた支援の工夫があれば、互いのよさを生かし、協力することの楽しさを味わえる運動会ができるであろうという仮説のもとに研究を進めてきた。ここでは、運動会の事前・事後における支援の具体例を考え、それに基づく実践事例での成果と今後の課題について述べる。

(1) 研究の成果

ア. 事前・事後指導における支援の具体例について

- ・支援の具体例を考えることにより、児童の関心や意欲を高める指導と協力の楽しさを味わわせる指導が段階的に、しかも効果的に実施できた。

イ. 事前指導の実践事例から

- ・写真・ビデオ等視聴覚に訴える資料を活用することにより、関心や意欲を高めることができた。
- ・種目へのめあてを明確にもたせることが、意欲的な取り組みにつながった。
- ・個人のめあてを知らせ合うことにより、努力や成果がはっきりわかり、互いに励まし合うことができて活動への意欲も高まった。

ウ. 事後指導の実践事例から

- ・カードや活動の感想・記録をもとにした話合いは活発になる。また、相互評価により、次の活動への意欲を高めることができた。
- ・教師の的確な指導・支援が児童の実践意欲を高める。

(2) 今後の課題

- ・仮説検証の視点にせまるための教師の支援を上・下学年に分けて考えたが、さらに低・中・高に分けて発達段階に応じた支援の工夫を明確にしていく必要がある。
- ・学校を取り巻く環境の変化に留意し、教師間の共通理解を図り、各校の特徴を生かした指導計画の立案が必要である。
- ・学校五日制にともなう学校行事の精選が問題となっている。練習時間の見通しはもとより、事前・事後指導の計画的な時間確保も大きな課題である。